

スマートラ沖 教訓未来へ

26日で地震発生20年

現地の復興に尽力 盛岡出身・三船康道さん

【東京支社】インド洋沿岸諸国に大きな被害をもたらした2004年のスマトラ沖地震から26日で20年を迎える。盛岡市出身の三船康道さん(75)「東京都台東区」は当時、最大被災地「インドネシア・バンダアチエ」復興計画の作成に尽力した。この間、本県には東日本大震災津波が襲った。災禍を超えて未来へと歩む国と土里を重ね、「教訓を伝えていかなければならぬ」と思いを強くする。

「本県に縁があったのか。この整備など計画の取りまごめまにこはもつ住めない」。家庭が導いた。野並み疲にさらわれ、海岸線に各国で2万人以上が死亡・行方不明となった未曾有の災害。復興計画は世界的にも注目され

復興計画は同国の原案を基にプロジェクトで「被災地の国際協力機構(ＩＣＡ)が担いめになる計画」と力を注いだ。い、共同企業体のチームが請け昨夏に十数年ぶりに現地を負った。東京大学修了の工訪問。当時思い描いていた居住地は内陸に移り、沿岸は海水浴場として整備された。現代社経営の三船さんも、防災やまちづくりの専門家として参画。的な建物も増え「からごと変わ05年4月から半年間、アドバイザーとして土理利用やインフラ震災遺構として津波の威力を



スマトラ沖地震や東日本大震災の被災地を歩き「教訓を伝えていかなければならぬ」と思いを語る三船康道さん

の復興」は接士で強調。そうした中で、コミュニティの存在や交流が一層豊になると指摘した。一方で、美空聖子の復興住宅では匿名性が高まり、個人情報保護の間でシムンが生じていることも伝えた。

今年11月、現地の催しにアジア建築関係の会社を経営する傍ら、各国の被災地訪問や震災関連の著書の出版、都府での防災講演で取り上げたのは、当時の訓練の普及にも力を入れている。若男ではなく東日本大震災の話している現場を見てきた三船康道。本県などの被災地を訪れて生かし、記録として残していかねばい」。取り組みが次なる災害への備えに、そして誰かの講演では「何年たっても立ち命を救うことにならざる信じ直れない人がいる」として「心



被災地の復興計画の検討を進める三船康道さん(左から3人目)＝2005年5月、インドネシア・バンダアチエ(本人提供)